

九州勢力の半島進出と撤退 – 百済西南部の古墳から考える –

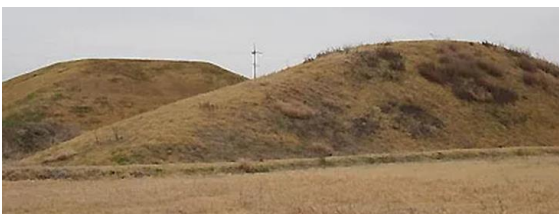
1、「百済南西部」に北部九州様式の古墳群が5世紀後半に出現し、6世紀初頭に消滅

①「北部九州様式」で北部九州の系譜を持つ
②北部九州の古墳と出土物等が類似 ③北部九州様式古墳群の一斉出現と消滅 ④在地勢力の「複合梯形墳」と隔絶したコロニーを形成 ⑤「前方後円墳コロニー」の核は百済政権を支える北部九州勢力 ⑥鳳德里（ホントグ）古墳と隠れていた前方後円墳

2、「九州様式古墳群の形成」と倭の五王

①遺跡と『書紀』・海外史書が示す北部九州勢力の半島進出の歴史 ②5世紀後半～末に崩壊した百済を九州勢力が復興 ③「倭の五王」は倭国（九州王朝）の王たちだった ④6世紀初頭の半島撤退と九州様式古墳群の消滅

5世紀に半島に侵攻、百済に駐留し高句麗・新羅と戦った倭の五王は九州の王たちだった



羅州 伏岩里 古墳群



新徳古墳（全羅南道咸平礼德里）

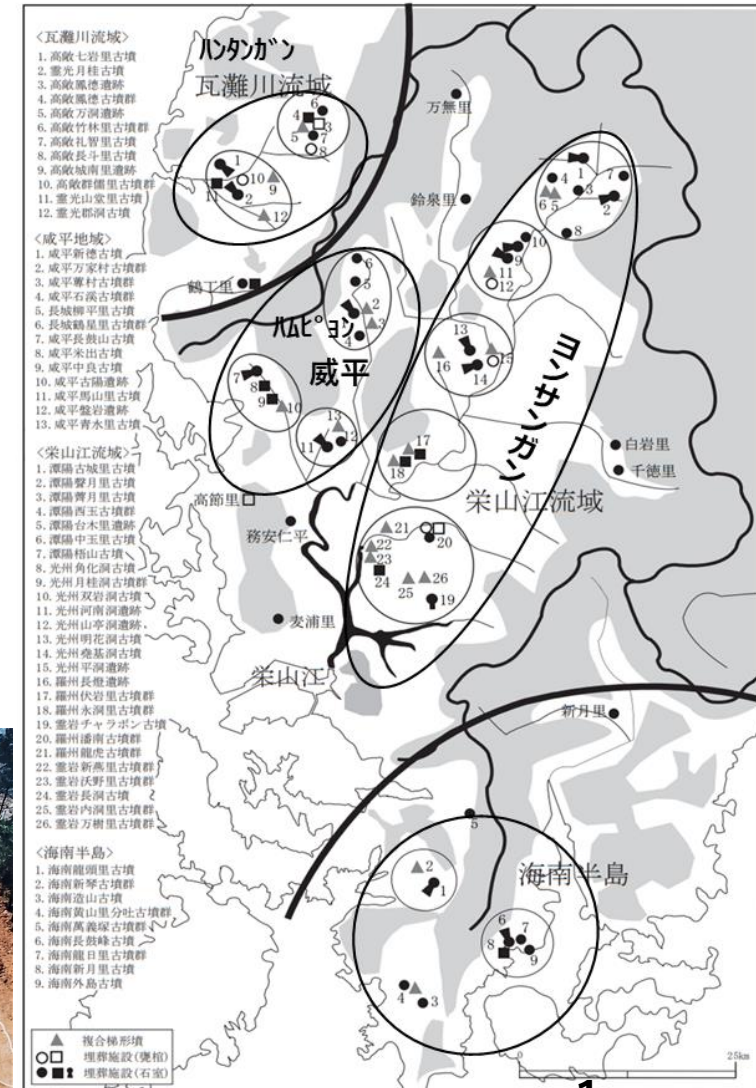


図2. 榮山江流域における前方後円形古墳と周辺の古墳群の分布図

NHKスペシャル古代ミステリーで対高句麗用に共通の型で量産したとする甲冑は全て九州出土



益生田古墳群出土

西都原古墳出土

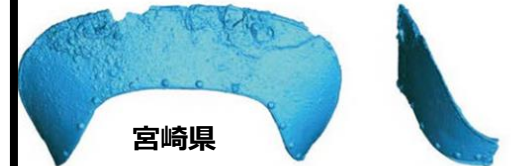
小木原古墳出土

共通の型を用いたとする古墳出土の甲冑群



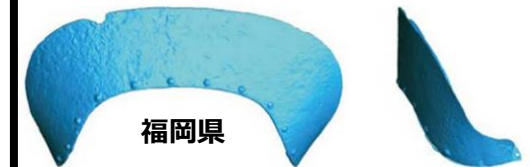
宮崎県えびの市

小木原 1 号地下式横穴墓 横矧板鉾留短甲



宮崎県

西都原 4 号地下式横穴墓 横矧板鉾留短甲 (1 号短甲)



福岡県

久留米市田主丸町麦生 横矧板鉾留短甲



福岡県行橋市

馬場代 2 号墳 横矧板鉾留短甲

福岡県久留米市田主丸町
麦生益生田 (ますおだ) 古墳群



宮崎県西都市西都原 4 号
地下式横穴墓 1 号短甲



宮崎県えびの市小木原
1 号地下式横穴墓出土



* 出土品ではないが857年（天安元年）開山とされる長野県飯田市立石寺蔵の短甲も同一型が使われている

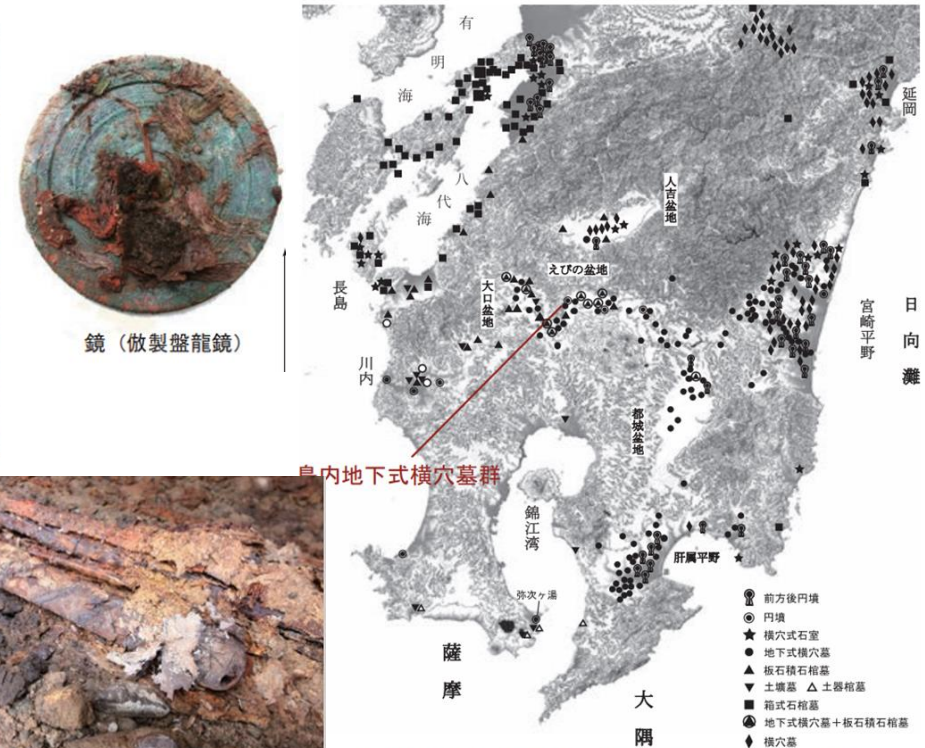
九州勢力の半島出兵を示す宮崎県えびの市島内字平松の島内地下式横穴墓群139号墓

未盗掘で、土に埋もれず、完全な状態の副葬品が大量に出土、1500 年前のタイムカプセルといわれ、朝鮮半島製銀装円頭大刀・甲冑一式・矢300本・装飾馬具倣製鏡他が出土⇒九州全体の勢力が半島に出兵

「島内地下式横穴墓群第139号墓」現地説明会資料（えびの市）



玄室内パノラマ合成写真



九州南部の中の島内地下式横穴墓群の位置

「**装飾付大刀（銀装円頭大刀）**」：朝鮮半島製（百濟ないしは加耶）。日本で類例の少ない大刀。1 号人骨に伴うもので、この人物が朝鮮半島での活動（軍事や交易などの交渉）に関わった可能性。

「**甲冑**」甲冑は頸甲・肩甲・草摺を含むセットで完存は希少。

「**矢**」約 300 本の矢は近接する時期では全国でも 3 番目の出土数。10 群中 5 群は矢羽根周辺に黒漆を塗った希少品。

「**装飾馬具**」2 組の装飾馬具（鈴付杏葉、金銅装（鉄地金銅製）雲珠・辻金具など）地下式横穴墓ではきわめて珍しい。

「**鏡**」鏡箱入りの倣製盤龍鏡、

「**平胡篋（やなぐい）**」装飾付の矢入れ具。同型は全国で 15 例程度。九州では福岡 島内 139 号地下式横穴墓で 1 例



銀装円頭大刀



矢・短甲



弓・矢



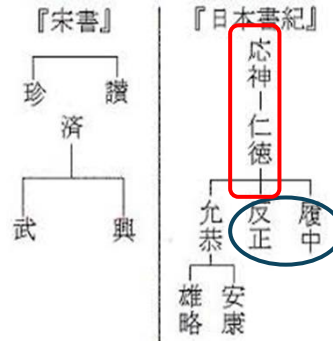
馬具・弓

中国歴代王朝の史書に見える半島に侵攻した「倭の五王」は倭国（九州王朝）の王たちだった

- ① 讚（413『晋書』安帝紀・421『宋書』夷蛮伝、425（同）、430？ 珍の可能性もある。『宋書』文帝紀）
- ② 珍（430？ 讚の可能性もある。『宋書』文帝紀、438『宋書』文帝紀&夷蛮伝）
- ③ 済（443『宋書』夷蛮伝、451『宋書』倭国伝&夷蛮伝&文帝紀、460？ 興の可能性『宋書』孝武帝紀）
- ④ 興（462『宋書』孝武帝紀&夷蛮伝、477？ 武の可能性高い『宋書』順帝紀&夷蛮伝）
- ⑤ 武（477？ 興の可能性も『宋書』順帝紀&夷蛮伝、478『宋書』順帝紀&夷蛮伝、479『南齊書』東南夷伝、502『梁書』武帝紀）

◆『宋書』（沈約441～513）・永初2年（421）「倭讚」。・元嘉2年（425）「讚」⇒「讚死して弟珍立つ」・元嘉20年（443）「倭国王済」⇒「済死す⇒世子興」・大明6年（462）「倭王*世子興」⇒「興死して弟武立つ」、順帝の昇明2年（478）使を遣わして上表す。昔より祖彌躬（みづか）ら甲冑を（つらぬ）き、山川を跋涉し、寧処に違（いとま）あらず。東は毛人を征すること、五十五国。西は衆夷を服すること六十六国。渡りて海北を平らぐること、九十五国・・・」。

『書紀』に名は無く、歴代天皇に合わない。



「讚」＝履中、「珍」＝反政説：在位年数が合わない

一元説の無理な天皇比定理由

宋書によれば讚・珍2代の在位年数の合計は少なくとも**26年以上**だが、『日本書紀』では履中（6年）、反政（5年）と、2天皇の合計在位年数は**11年**で、讚＝履中、珍＝反政は不成立。

「讚」＝仁徳、「珍」＝反政説：続き柄が合わない

讚＝履中説：去来穂別（イサホワケ）の「サ」を「讚」と表記
＝仁徳説：大鷦鷯（オホササギ）の「サ」を「讚」と表記
珍＝反政説：瑞齒別（ミズハワケ）の「瑞」を中国が誤って「珍」と表記。
済＝允恭説：雄朝津間稚子（ヲアサツマノワケ）の「津」を「済」と表記。
興＝安康説：穴穂（アナホ）を中国が誤って「興（ホン）」と表記。
武＝雄略説：大泊瀬幼武（オホハツセワカタケ）の「武」をとった。
⇒一貫性・論理性なく全く恣意的

『宋書』では、讚は珍の兄だが、『日本書紀』では仁徳と反政は親子で、讚＝仁徳、珍＝反政も不成立。

「倭の5王」はヤマトの天皇ではなく、百済の古墳から九州の王たちと考えられる

「百濟南西部」に北部九州様式の前方後円墳が5世紀後半に出現し、6世紀初頭に消滅

「倭の五王」時代後半の百濟南西部に北部九州様式の前方後円墳が出現し、6世紀初頭に一斉に消滅する

1、韓国旧百濟榮山江流域に「墓の様式や出土品が北部九州と一致する前方後円墳（*2023年現在17基）」が5世紀末頃（*後半から）に突然出現し6世紀前半（*初頭）に消滅する。（注：近年前方後円墳だけでなく北部九州様式の石室を持つ円墳・方墳も多数発掘されている）

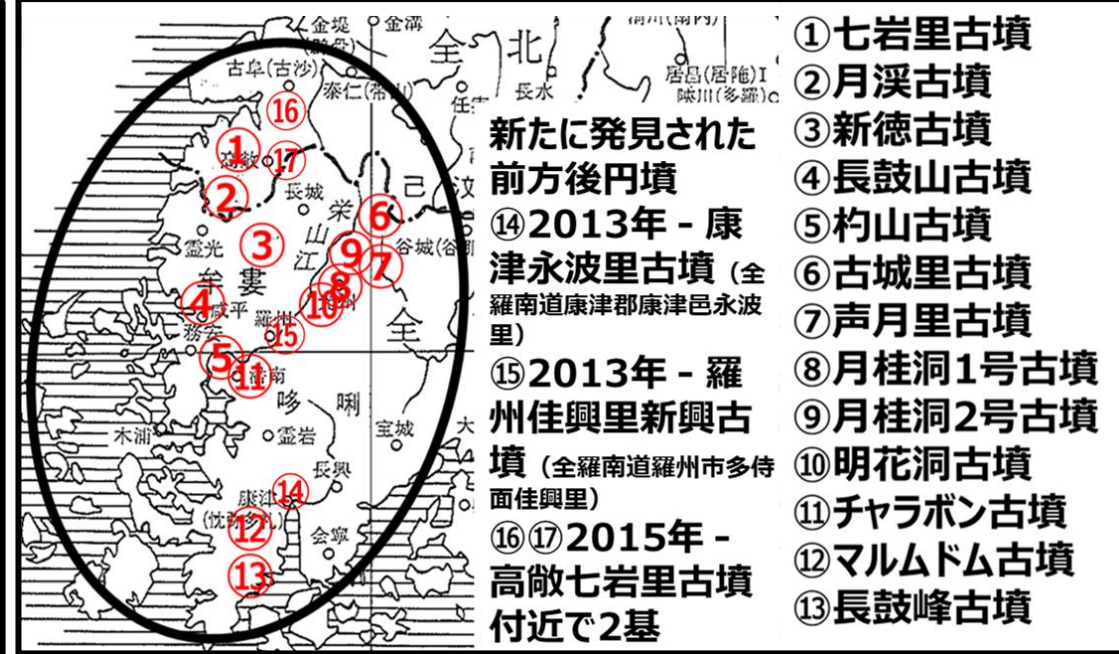
2、榮山江流域を中心とする百濟南西部に分布しており、韓国のそれ以外の地にはみられない。

3、古墳群のように一箇所に集中しておらず広く分布している。（注：その後の研究では前方後円墳を核としてコロニーを形成していることが判明）

4、他の韓国式古墳群とは離れた場所に孤立しているものが多い。

5、若干の異論もあるが、5世紀末～6世紀初めの築造とみられる。（注：5世紀後半以降とするのが正確）

6、これらの前方後円墳は5世紀末～6世紀初頭に北部九州の勢力が造ったと考えられる。（注：「前方後円墳を含む北部九州様式古墳群は5世紀末～6世紀初頭に北部九州の勢力が造った」とするのがより正確。）



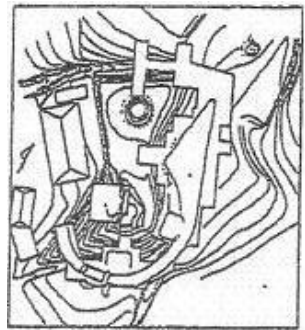
羅州 伏岩里 古墳群

新徳古墳（全羅南道咸平礼徳里）

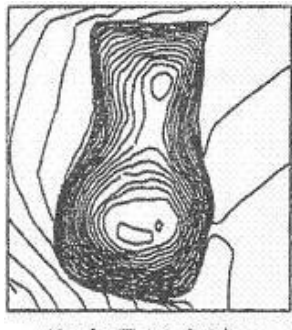


これらの古墳群は「北部九州様式」で北部九州の系譜を持つ

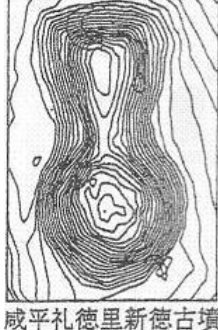
百済南西部に5世紀末頃「北部九州様式古墳」が突然出現し6世紀前半に消滅する



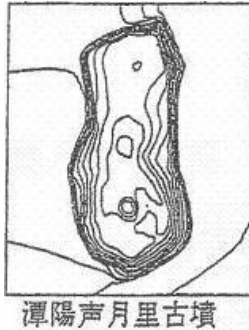
光州明花洞古墳



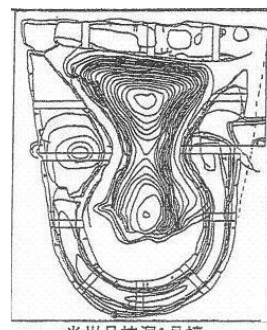
海南昌里古墳



咸平礼德里新徳古墳



潭陽声月里古墳



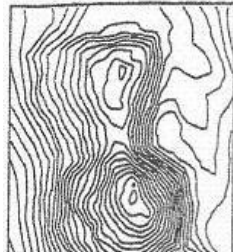
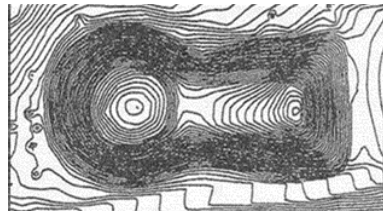
光州月桂洞1号墳



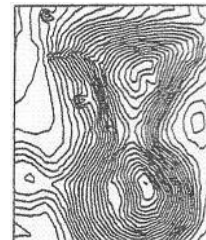
光州月桂洞2号墳



海南方山里長鼓峰（チャンゴサン）古墳



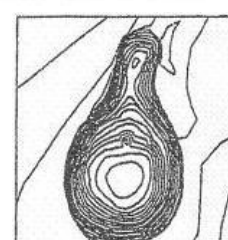
霊光月山里古墳



咸平馬山里杓山古墳



高敞七峯里古墳



霊岩泰洞里古墳

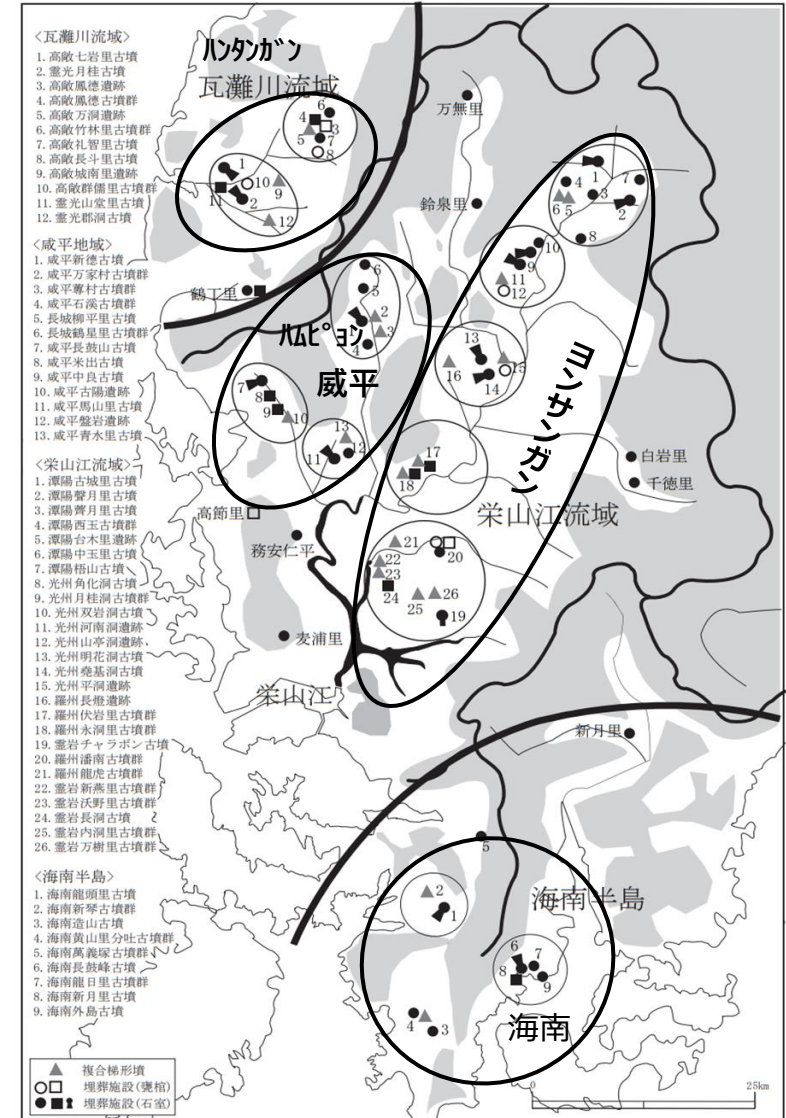
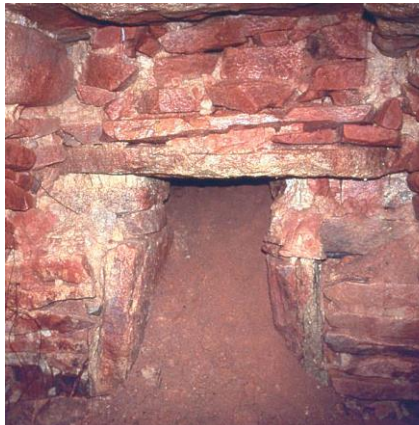
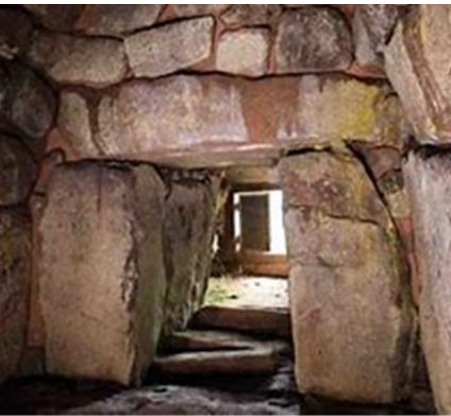


図2. 榮山江流域における前方後円形古墳と周辺の古墳群の分布図

榮山江流域の前方後円墳の横穴式石室は、**平面長方形で平天井を呈し、立柱石と腰石を配する形態**で、時には石室に赤色顔料の塗布が確認される（＊装飾古墳）点で、北部九州地域にその系譜が求められる。

（朴 天秀慶北大学考古人類学科教授）「韓半島南部に倭人が造った前方後円墳—古代九州との国際交流—」九州国際大学 国際関係学論集 第5巻2010)より)

左：日拝塚古墳石室 6世紀 福岡県春日市下白水南。春日市奴国の丘歴史資料館（春日市教育委員会 文化財課）。右：海南長鼓山古墳の石室（ベンガラ塗装）



北部九州の古墳と出土物等が類似

①ゴホウラ製貝釧

海南月松里造山古墳（6C初頭）から出土した**繁根木型のゴホウラ製貝釧**は、佐賀県の関行丸古墳、福岡県の王塚古墳の周辺に位置する櫛山古墳と、熊本県の江田船山古墳に隣接する伝佐山古墳から出土していることより、これら九州の集団によって栄山江流域に搬入された可能性が極めて高い。（朴 天秀）

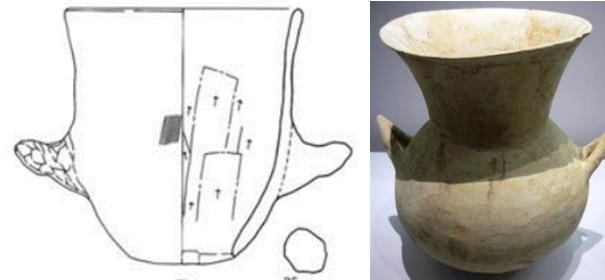


ゴホウラ製貝釧
（熊本市立博物館）



②栄山江流域産の土器

栄山江流域に見られる両耳付壺・鋸歯文土器・有孔広口小壺等（*馬韓土器～4C末）が対馬（塔の首2号石棺墓ほか）と北部九州（前原市浦志遺跡・佐賀県神埼郡神埼町野田遺跡ほか）で出土。



両耳付壺（左＝野田遺跡、右＝韓国国立中央博物館所蔵）

③鳥足紋叩き土器の石室内に副葬

福岡県苅田町の番塚古墳、福岡市の梅林古墳では栄山江流域産の鳥足紋叩き土器が石室内に副葬。日本列島の前方後円墳でこの地域産の土器の副葬はこの2例。



韓国益山笠店里古墳出土金王冠と飾履
*全羅北道益山市

鳥足紋叩き目



熊本江田船山古墳出土金王冠と飾履

竪穴式石室の構造も北部九州地域に系譜を持つ

5世紀前半の西南海岸地域に点在する竪穴式石室については、日本列島の**北部九州地域の竪穴式石室に直接的な系譜を求めることが可能**であり、基本的には当地へ渡来した倭系集団が主体となって構築した可能性が高いと推定。5世紀前半～6世紀前葉の**栄山江流域の竪穴系横口式石室については**、他地域から祖形となるものをそのまま移植したというよりも、栄山江流域社会が中西部地域や嶺南地域、あるいは**北部九州地域などと活発に交渉をくりひろげる中で受容した墓制**と考えられる。高田貫太「5世紀の朝鮮半島西南部における竪穴式室の構造」（国立歴史民俗博物館研究報告第217集2019年9月）

相当の長期間にわたる北部九州勢力の駐在と地域社会との交流が推測されます。
（九州の勢力が一時的に駐在したものではない）



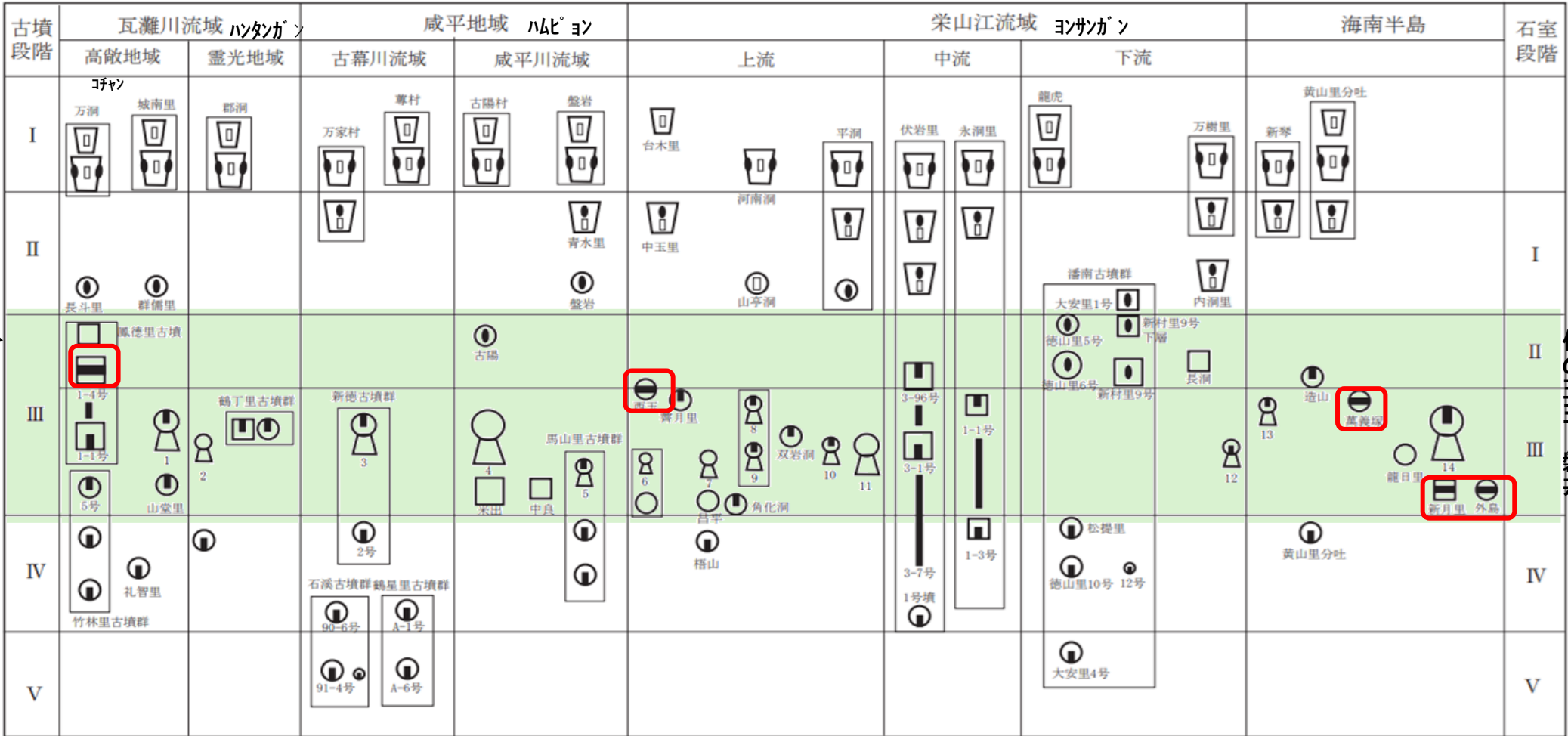
北部九州様式古墳群の一斉出現と消滅（その後の調査研究で前方後円墳だけでなく円墳・方墳など多数発見されている）

『書紀』仁徳41年（353⇒435年頃か）百濟南西部支配。◆「紀角宿禰を百濟に遣し、始めて国郡の壇場を分ち、具に郷土所出を録す（*徴税台帳作成）」。仁徳41年（353）は応神8年（277実年397年）の76年後。2倍年暦で38年後、435年頃。

5世紀末頃突然出現し6世紀前半に消滅

512年この地域（百濟南西）の四県を百濟に返還。532年任那加羅（金官加羅）滅亡

『書紀』に記す倭国の百濟進出と一致します。



＜前方後円形古墳＞

1. 高敞七岩里古墳	8. 光州月桂洞1号墳
2. 靈光月桂古墳	9. 光州月桂洞2号墳
3. 咸平新徳1号古墳	10. 光州明花洞古墳
4. 咸平長鼓山古墳	11. 光州堯基洞古墳
5. 咸平馬山里古墳	12. 靈岩チャラボン古墳
6. 潭陽古城里古墳	13. 海南龍頭里古墳
7. 潭陽聲月里古墳	14. 海南長鼓峰古墳

＜複合梯形墳の分類＞

	複合梯形墳1類(木棺単独)	
	複合梯形墳2類(木棺中心+甕棺追葬)	
	複合梯形墳3類(甕棺中心・木棺)	

＜墳形と埋葬施設＞

	埋葬施設(木棺)
	埋葬施設(甕棺)
	埋葬施設(堅穴式石槨)
	埋葬施設(九州系石室)
	埋葬施設(百濟系石室)

10m以下
10～30m
30～50m
50～70m
70m以上

倭の五王・磐井

5世紀後期～末期に在地勢力の「複合梯形墳」と隔絶した「前方後円墳コロニー」が誕生

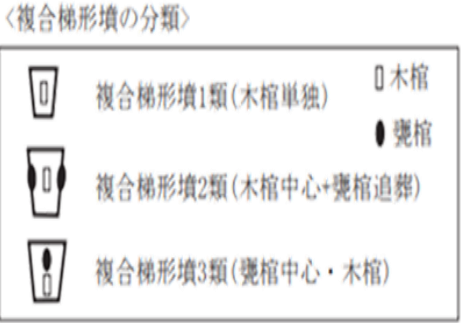
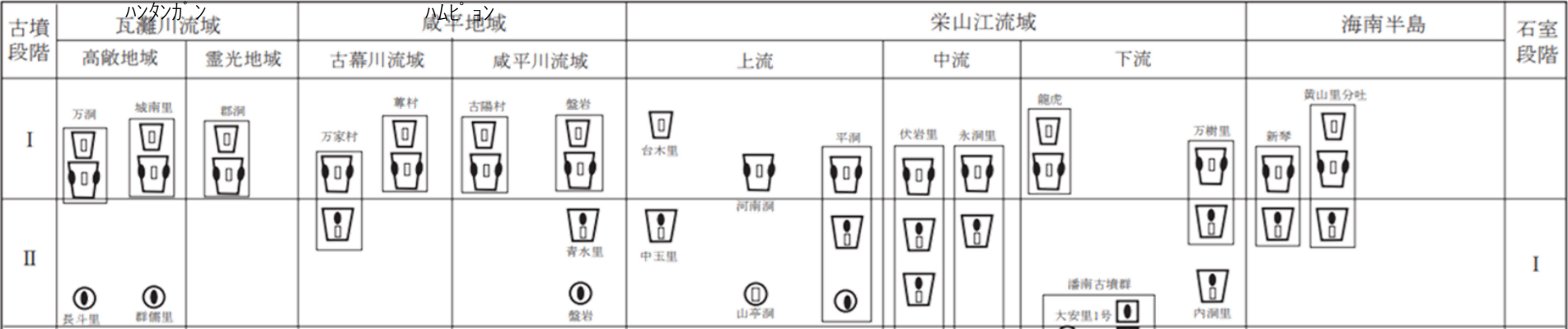


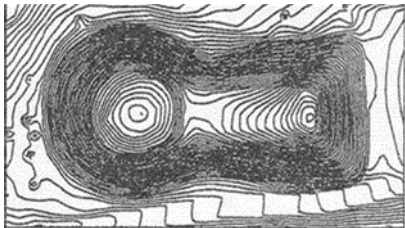
図 2. 榮山江流域における前方後円形古墳と周辺の古墳群の分布図：崔榮柱（前出16頁）を加工。

在地勢力の「複合梯形墳」（～4世紀末）



写真は韓国KBS 2005年7月22日放映「ヒストリースペシャル 日韓歴史戦争永山江長郷型古墳」より。

海南方山里長鼓山古墳



〈表 1〉 榮山江流域の墳形と埋葬施設との関係 崔榮柱（前出12頁）

墳形 埋葬施設	梯形			方形	円形	前方後 円形	古墳段階		段階
	馬蹄形	長梯形	短梯形						
木棺単独	◎	○	○				複合梯形墳	1類	I
木棺中心+甕棺追葬	○	◎	○					2類	
甕棺中心+木棺		○	◎					3類	
九州系石室(+甕棺)				◎	◎		甕棺古墳		II
百濟系石室				◎	◎	◎	石室古墳		III
				○	◎				IV
				○	◎				V
墳丘	低	水平拡張	垂直拡張	高	高→低	高			



図 2. 榮山江流域における前方後円形古墳と周辺の古墳群の分布図

「前方後円墳コロニー」の核は百済政権を支える北部九州勢力

＜瓦灘川流域＞

1. 高敏七岩里古墳
2. 霊光月桂古墳
3. 高敏鳳徳遺跡
4. 高敏鳳徳古墳群
5. 高敏万洞遺跡
6. 高敏竹林里古墳群
7. 高敏礼智里古墳
8. 高敏長斗里古墳
9. 高敏城南里遺跡
10. 高敏群儒里古墳群
11. 霊光山堂里古墳
12. 霊光郡洞古墳

瓦灘川流域

高敏七岩里古墳群で+2

＜咸平地域＞

1. 咸平新徳古墳
2. 咸平万家村古墳群
3. 咸平尊村古墳群
4. 咸平石溪古墳群
5. 長城柳平里古墳
6. 長城鶴星里古墳群
7. 咸平長鼓山古墳
8. 咸平米出古墳
9. 咸平中良古墳
10. 咸平古陽遺跡
11. 咸平馬山里古墳
12. 咸平盤岩遺跡
13. 咸平青水里古墳

咸平

＜栄山江流域＞

1. 潭陽古城里古墳
2. 潭陽聲月里古墳
3. 潭陽齊月里古墳
4. 潭陽西玉古墳群
5. 潭陽台木里遺跡
6. 潭陽中玉里古墳
7. 潭陽梧山古墳
8. 光州角化洞古墳
9. 光州月桂洞古墳群
10. 光州双岩洞古墳
11. 光州河南洞遺跡
12. 光州山亭洞遺跡
13. 光州明花洞古墳

高節里

務安仁平

麦浦里

万無里

鈴泉里

佳興里新興古墳

栄山江流域

- ▲ 複合梯形墳
- □ 埋葬施設(甕棺)
- ■ 埋葬施設(石室)



海南竜日里古墳から出土した倭の須恵器

＜海南半島＞

1. 海南龍頭里古墳
2. 海南新琴古墳群
3. 海南造山古墳
4. 海南萬山里分吐古墳群
5. 海南萬義塚古墳群
6. 海南長鼓峰古墳
7. 海南龍日里古墳群
8. 海南新月里古墳
9. 海南外島古墳

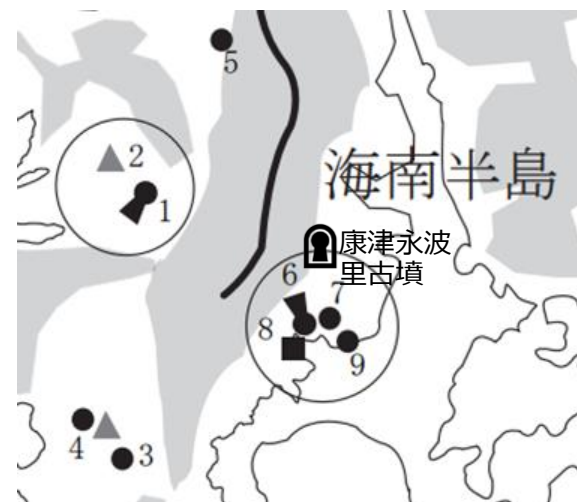
- ▲ 複合梯形墳
- □ 埋葬施設(甕棺)
- ■ 埋葬施設(石室)

百済南西部の古墳群では、北部九州型前方後円墳の周りを、在地の墳墓と隔絶した北部九州型石室を持った円墳・方墳が取り囲んでいる。これは北部九州から進出した勢力の有力者が、随う臣下・一族とともに各々の拠点領域を統治し、コロニーを形成していたことを示す。

百済政権を支えていた筑紫の勢力

◆雄略23年（479）四月、百済文斤王（もんこう）薨る。天王、末多王の幼年くして聰明（さと）きを以て…王とならしむ、仍ち兵器を賜ひ、并せて筑紫国の軍士五百人を遣して、国に衛（まも）り送らしめ、是を東城王とす。是の歳、百済の調賦（みつきもの）、常の例より益（まさ）れり。筑紫安致臣・馬飼臣等、船師（ふないくさ）を率ゐて高麗を撃つ。

502年には筑紫の島に生まれた武寧王が王となる。このように筑紫の勢力が百済の政権を支えていた。こうした人々が百済南西部の北部九州型古墳コロニーを形成していたと考えられる。



鳳德里 (ホントリ) 古墳と隠れていた前方後円墳⇒コロニーの核となる前方後円墳が存在

鳳德里 (ホントリ) 古墳 (고창 봉덕리 고분) (推定方形墳。全北高敞 (コチャン・こうしょう) 郡雅山面鳳德里。L72m、W50m、H7m。5世紀初葉か)

1998年発見、大型墳丘墓 4 基のうち1号墳が2008年調査された。

1号墳は石室墓5基 (横穴式石室4基、竖穴式石室 1 基)、甕棺墓2基を含む「蜂の巣型古墳 (アパート型墓)」鉄18個付き金銅製履物・倭国系須恵器 (小壺裝飾有孔広口壺)・矢筒・大刀2点・刀子が出土。

周囲に複数の「前方後円墳」の「痕跡」

写真は【全北発見 高敞 (コチャン) 鳳德里 古墳の秘密の鍵】JTV2019.12.5より。



在地の馬韓系墳墓と隔絶



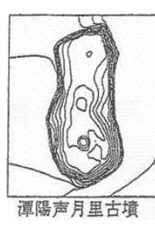
咸平馬山里杓山古墳



海南昌里古墳



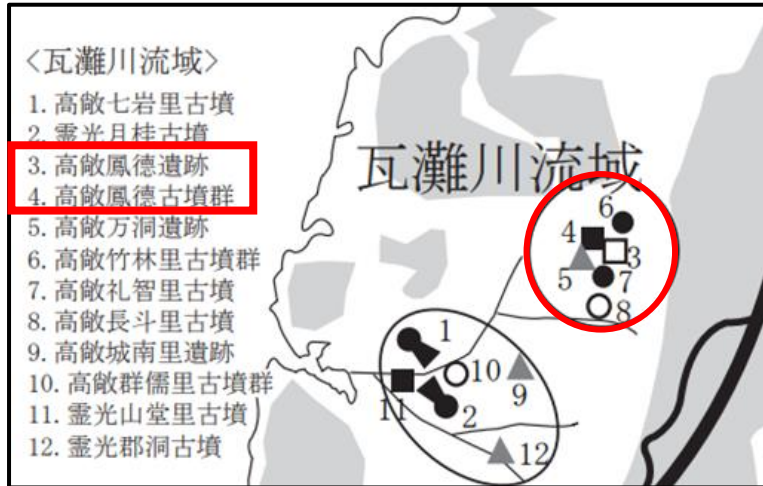
光州月桂洞2号墳



潭陽声月里古墳



新徳古墳 (全羅南道咸平礼德里)

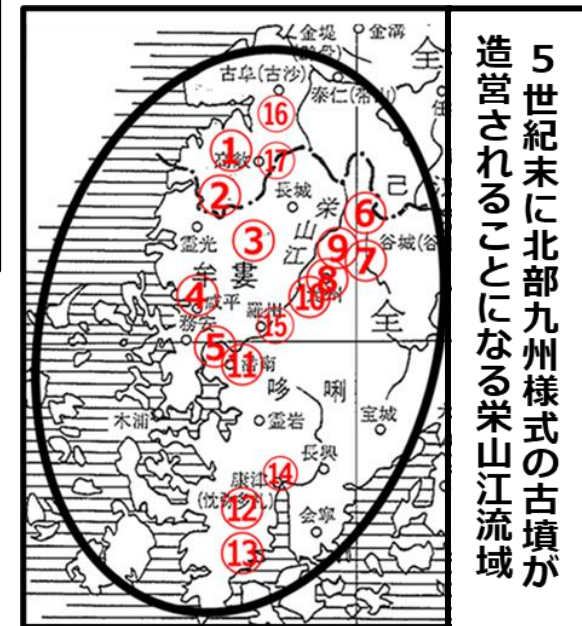


遺跡と『書紀』『好太王碑』『三国史記』等に記す北部九州勢力の半島進出の歴史

倭国勢力は栄山江以前に漢城に進出していた

「韓国ソウル付近の百済遺跡で1600年前の日本人居住痕跡が発見」され5世紀初頭に倭人集団が百済首都「漢城」に進出していたことが判明した（2024年3月7日韓国ハンギョレ新聞報道）

（報道内容）大韓文化財研究院は6日、今日のソウルである漢城に百済王朝が都を置いた漢城百済時代（西暦18年～西暦475年）の官宮土器窯関連遺跡（京畿道城南市福井洞）から、古代日本の権力層の大型墓を飾った土器装飾遺物の「埴輪」を初めて発見したと明らかにした。大韓文化財研究院のイ・ヨン Chol 院長は、「倭の職人たちが日本から移住して百済の官窯や工房に入り、百済の職人たちと一緒に作業した痕跡と思われる」とし「墓の装飾物である埴輪の実体が、韓国の首都圏の百済施設跡で明確に確認されたのは初めて」と話した。…1600年～1500年前に古代日本の移住民が百済のソウルの都に暮らし、特有の墓を建てて飾った可能性が提起され…百済の中央政府があった首都圏一帯の工房で、**栄山江流域の倭系遺物より時期が早い5世紀前半の埴輪が出た**ことで、百済の中央政府と古代日本の間の密接な直接交流が先に進み、続いて百済の領域である栄山江流域と倭との交流が続いた可能性を示している。



5世紀末に北部九州様式の古墳が造営されることになる栄山江流域



5世紀前半の刷毛目がある埴輪円形土器破片



帯跡と一定間隔の細線仕上げを確認できる土器破片

写真は 大韓文化財研究院提供。ハンギョレ新聞社電子版より転載。



城南市福井洞の百済土器窯遺跡

報道では職人たちの移住とするが、文献上「政治・軍事的に影響を持つ九州勢力の漢城進出を示す」

遺跡と『書紀』『好太王碑』『三国史記』等に記す北部九州勢力の半島進出の歴史

①4世紀後半に倭国は新羅との境界の加羅7国を平定（神功紀）

『書紀』神功49己巳年（『書紀』紀年の249年・**実年369年***）には新羅討伐による加羅7国の平定記事が見られ、岩波『書紀』は、比自炆・南加羅・喙国・安羅・多羅・卓淳・加羅の「7国」を**任那・加羅と新羅の境界領域にある諸国**と治定。*『書紀』の神功紀は120年繰上げられている。

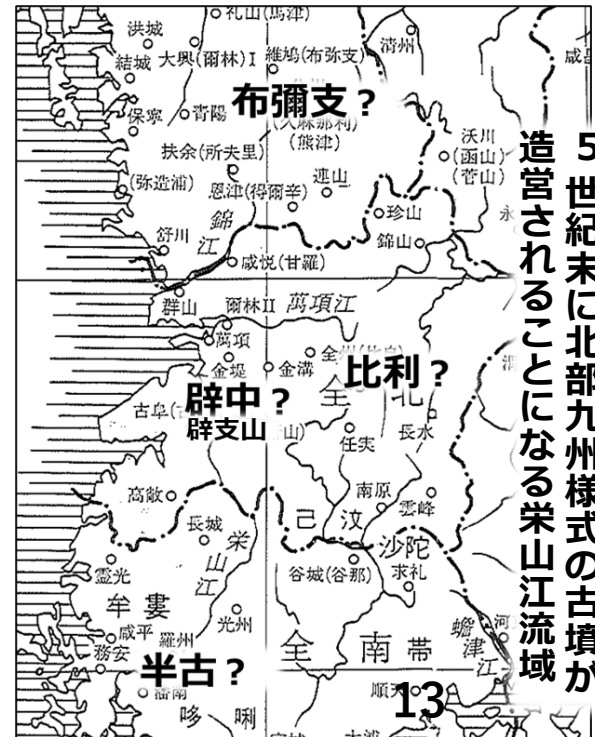
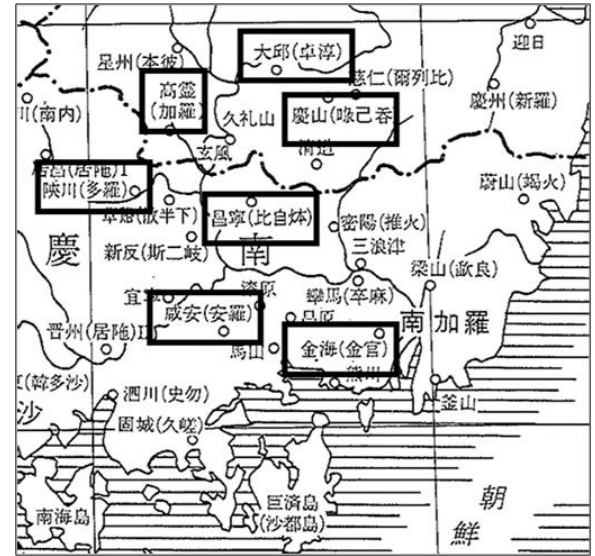
栄山江流域は、370年頃に百済の支配下に編入

その際比利・辟中・布彌支・半古の百済南西部の四邑が臣従する。神功50年（250実年370年）にこれら「海西の諸の韓国を既に百済に賜ふ」とあるから、後に北部九州型古墳が造営される**栄山江流域は、370年頃に百済の支配下に入った**こととなる。◆神功50年（250）（実年370年）海西の諸の韓国を既に百済に賜ふ。

②369年に百済と倭国の盟約（辟支山（へきさん）の盟約）が結ばれ同盟関係が成立

◆『書紀』神功49年（249・実年369）。千熊長彦と百済王と、百済国に至りて、辟支山（*全羅北道金堤）に登りて盟ふ。…今より以後、千秋萬歳に、絶ゆること無く無窮ること無けむ。常に西蕃と稱（い）ひつつ、春秋に朝貢（みつきたてまつ）らむ。」とまうす。

③**371年に百済はこの同盟を背景に、平壤の戦いで高句麗故国原王を戦死させ、都を漢山に移す。**◆『書紀』神功52年（252、実年372）9月丙子（10日）、**久氐等、千熊長彦に従ひ詣る。則ち七枝刀一口・七子鏡一面・及び種々重寶を献る。⇒369年～372年に千熊長彦は漢城におり、同盟に基づき対高句麗戦に参画したことになる。**



5世紀末に北部九州様式の古墳が造営されることになる栄山江流域

倭の五王（「讃」—弟「珍」—息子「済」—息子「興」—弟「武」）の半島進出

① **391年に「讃」は半島南部（百済・任那・新羅）に侵攻**（神功は389年に薨去）

◆『好太王碑』倭は未卯年（391）を以て來り、渡海し**百殘加羅新羅を破り、以て臣民とす。**

② **392年に高句麗好太王は反攻をかけ、百済漢江以北まで併合し、百済辰斯王は死去。**◆『三国史記』「百済本紀」辰斯王（385~392）8年（392）7月。高句麗王談德，兵四萬を帥て、來りて北鄙を攻ち、石岬等十餘城を陷す。（略）漢水の北の諸部落、多に没す（辰斯王385~392）狗原行宮で薨る。

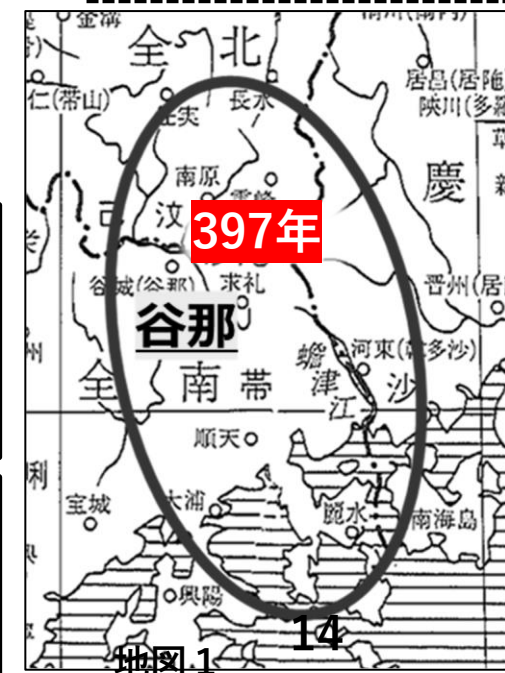
③ **392年倭国の紀角宿禰等、阿花王を擁立、王として帰る**◆『書紀』応神3年（262）（*実年は392年）是歲、百済辰斯王（在位385~392）立ちて、貴國の天皇に礼失（な）し。故に紀角宿禰・羽田矢代宿禰・石川宿禰・木菟宿禰を遣して、その礼無き狀を噴讓（ころ）はしむ。是に由りて、百済国、辰斯王を殺して謝（つぐな）ひき。紀角宿禰等、便（すで）に阿花を立てて王として帰る。

④ **396年に阿花王は好太王の攻勢に屈して高句麗に臣従する。**

◆『好太王碑』永樂6年丙申（396）（高句麗）王躬ら水軍を率いて殘国を討科し、…十八の城を攻め取る…百済王（阿莘王392~405）跪き自ら今以後（高句麗の）永き奴客となることを誓う。

⑤ **397年に倭国はこれに対し東韓一帯を占領。百済は倭国に臣従し直支（後の腆支王）が倭国に出される。**◆『書紀』応神8年（397）阿花王（392~405）立ちて貴國に礼失し。故に我が枕彌多禮・及び岬南・支侵・谷那・東韓の地を奪はれぬ。是を以て、王子直支（とき）を天朝に遣して、先王の好を脩（おさ）む。

⑥ **400年に高句麗は新羅を救援、任那・加羅地域にも出征し、この攻勢により百済は再び高句麗に臣従**◆『好太王碑』永樂10年（400）歩騎五萬を遣し新羅に往く。倭中に満つ。官軍至りて倭賊を退く。倭を急迫し、任那・加羅城を抜く。百済に軍を移し城を囲み、**百済は倍旧の貢物と王子を質に出す。**

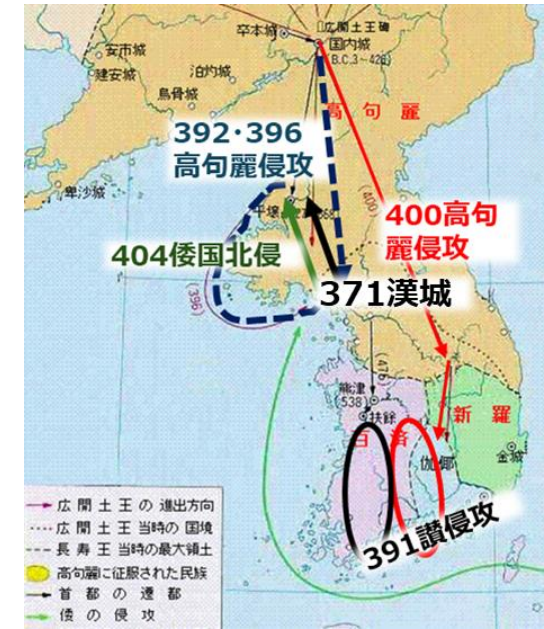


遺跡と『書紀』『好太王碑』『三国史記』等に記す北部九州勢力の半島進出の歴史

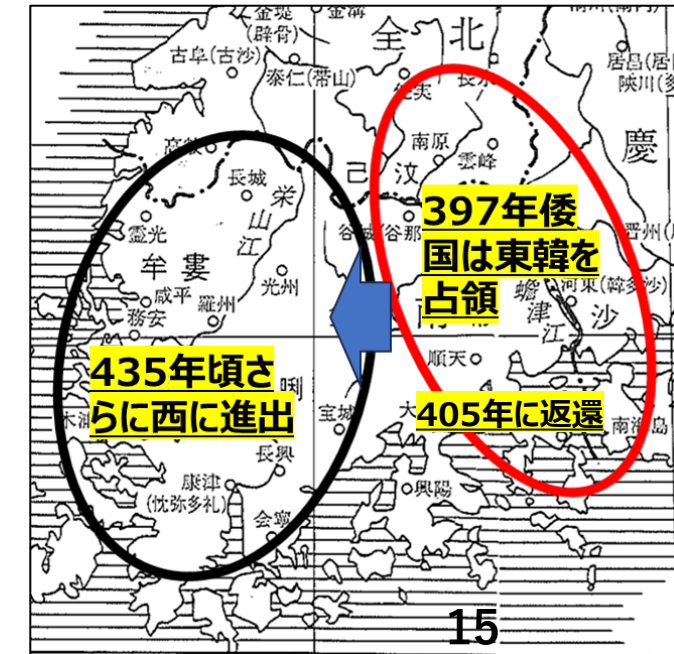
⑦ **404年に倭国は反転攻勢をかけ、半島の奥深く侵攻**◆『好太王碑』永樂14年（404）甲辰、**而るに倭、不軌にして帶方界に侵入す**。好太王自ら兵を率い倭寇を斬りつくすこと無数。永樂17年（407）五万を派兵し倭寇を追い、平壤を過ぎ討伐す。兜類万余、資材を獲得す。

⑧ **405年の阿花王崩御に際し、倭国は百済腆支王（てんしおう・ときおう）を擁立し、漢城で即位させる**◆『書紀』応神16年（405）、百済阿花王薨りぬ。天皇、直支王（ときおう）を召して謂ひて曰はく「汝国に返りて、位に嗣げ。」とのたまひ、仍りて且（ま）た**東韓の地を賜ひて遣す**。東韓は、甘羅城・高難城・爾林城是なり◆『三国史記』磔禮（せつらい）訓解を殺し、自ら立ちて王となる。腆支、倭に在りて（*訓解の）計るを聞き、哭泣し歸らむことを請す。**倭王、兵士百人を以て衛り送る。・・腆支倭人を留め自ら衛り、海島に依りて待つ**。国人磔禮を殺し、腆支を迎へ即位せしむ。

⇒5世紀初頭の百済王都漢城に兵士を含む九州の勢力が駐留していたことになる



⑨ **435年頃に倭国（九州王朝）「珍」は百済王族の抵抗を抑え百済南西部を支配**◆『書紀』仁徳41年（実年435年ごろ）紀角宿禰を百済に遣して始めて**国郡の壇場（さかい）を分ちて、具（つぶさ）に郷土所出（くにつもの）を録す**。是の時に、百済の王の族酒君、礼無し。是に由りて、紀角宿禰、百済王を訶（こ）ひ責む。時に百済の王悚（かしこま）りて、鐵の鎖を以て酒君を縛（ゆ）ひて、襲津彦に附けて進上す。⇒倭国が百済の一部を事実上占領し、「**税（貢納品）の徴収台帳**」を作成したことを示す。阿花王時代に百済中南部は倭国の支配下に入っている（地図1）から、**435年頃に百済南西部を支配した**と考えられる。これは毗有王が433年に新羅と和したことへの報復。従って**漢城に倭国勢力が進出するのは4世紀末から5世紀初頭、栄山江流域に北部九州の勢力が本格的に駐留するのは5世紀中葉以降**となり、「**百済の中央政府があった首都圏一帯の工房で、栄山江流域の倭系遺物より時期が早い5世紀前半の埴輪が出た**」という考古学の状況は文献と合致する。



5世紀後半～末に崩壊した百済を倭国が復興。そのころ北部九州様式の古墳が造営される

⑩ 475年 高句麗長寿王百済を討ち事実上百済は崩壊。

高句麗は475年に百済に侵攻し、王都漢城を陥落させ、蓋鹵王（がいろうおう455～475）を誅殺し、男女八千人を捕虜とした。子の文周王（477年に暗殺）は逃れ熊津に遷都したが、**事実上百済は崩壊。**

◆『三国史記』『高句麗本紀』長寿王63年（475）9月、王兵三萬を帥めて、百済を侵し、王所都漢城を陥し、其王扶餘慶を殺して、男女八千を虜として歸る。

◆『三国史記』『百済本紀』蓋鹵王21年（475）秋九月、麗王巨璉（長寿王）帥兵三萬、來圍王都漢城。王閉城門不能出戰。麗人分兵為四道、挾攻、又乘風縱火、焚燒城門。人心危懼、或有欲出降者。王窘（くるしみ）不知所圖、領數十騎、出門西走。麗人追而害之。

◆『書紀』雄略20年（476*）冬、高麗王、大きに軍兵を發（おこ）して、伐ちて百済を盡（ほろぼ）す。（略）百済記に云ふ、「蓋鹵王の乙卯年（475）冬、狛の大軍來りて、大城を攻むること七日七夜、王城降陷（やぶ）れて、遂に尉禮（いれ）を失い、国王及び太后、王子等、皆敵の手に没す」といふ。（*1年ずれ）

⑪ 479年 東城王を軍事力で擁立し高句麗を討つ

百済崩壊後、高句麗と戦い百済を復興させたのは筑紫の勢力

雄略23年（479）に倭国「武」は末多王を東城王として擁立。「筑紫国の軍士」に護られて百済に帰国。「筑紫の將軍」が高句麗を攻めた。つまり475年の百済崩壊後「筑紫の軍士・將軍」らが高句麗と戦い百済を復興させたもので、当時の百済は筑紫の倭国によって守られ、国として維持されたことを表す。

◆『書紀』雄略23年（479）四月、百済文斤王（もんこうおう三斤王477～479）薨る。天王、昆支王（こんきおう）の五子中第二の末多王の幼年くして聰明（さと）きを以て、勅して内裏に喚（め）し、親ら頭面を撫で、ねむごろにいましめて、其の国に王とす。兵器を賜ひ、**筑紫国の軍士五百人を遣して、国に衛（まも）り送りて、是を東城王（479～501『三国史記』）とす。**是の歳、百済の調賦（みつきもの）、常の例より益（まさ）れり。**筑紫安致臣・馬飼臣等、船師（ふないくさ）を率めて高麗を撃つ。⇒502年に末多王は廃され「筑紫の島」で生まれた武寧王が即位。**

◆『書紀』武烈4年（502*）是歳、百済末多王無道にして、百姓に暴虐す。国人遂に除き嶋王を立て、是を武寧王とす。（*1年ずれ）

筑紫の勢力が百済を復興させ高句麗と戦う。この頃九州様式の古墳が造営⇒倭の5王は九州の王たちだった

6世紀初頭に任那は滅亡、百済南西部は百済の支配に復し、九州系古墳が消滅

⑫ 512年に百済南西部の栄山江一帯を百済に返還

武寧王即位以後新羅の攻勢が激しく、512年には任那防衛を百済に要請するため**阿花王時代に奪った百済南西の四県を百済に返還**する。

◆『書紀』継体6年（512）夏4月丙寅（6日）、穗積臣押山を遣して百済に使せしむ。仍ち**筑紫国の馬耜匹**を賜ふ。冬12月、百済、使を遣して貢調す。別に表して**任那国上哆唎・下哆唎・娑陀・牟婁、四縣**（*百済南西部の全羅南道ほぼ全域）を請ふ。哆唎国守穗積臣押山奏して曰く（略・大伴大連金村の賛同を得て4県を百済に付ける）表に依り**任那四縣を賜ふ**。

百済に栄山江州域を返還した512年～532年頃北部九州様式の古墳とコロニーが消滅
これは九州勢力の百済からの撤退を意味する。

⑬ 532年には任那加羅（金官加羅）が滅亡する

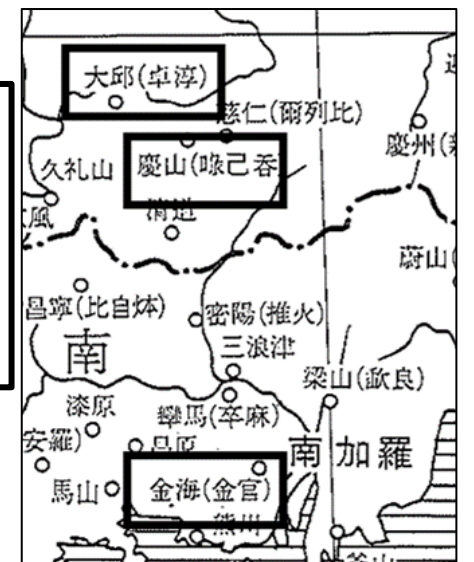
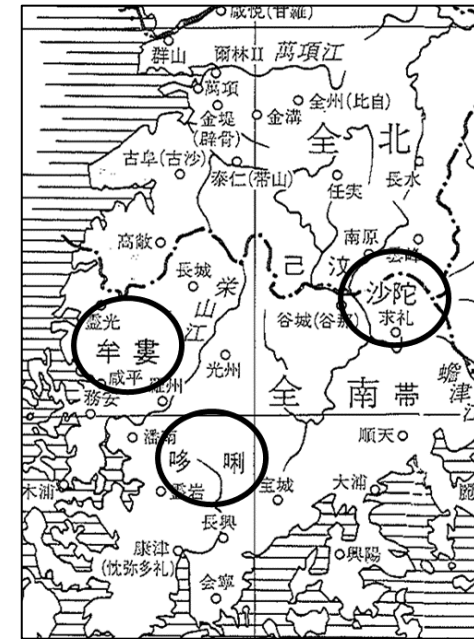
◆『三国史記』法興王19年(532)、金官国主金仇亥と妃及び三子（奴宗・武徳・武力）、国帑と寶物を以て來降す。⇒540年に新羅討伐を検討するも不可能と判断

◆『書紀』欽明元年（540）9月天皇、問諸臣に問ひて曰く「幾許の軍卒、新羅を伐ち得む。」物部大連尾輿等奏して曰く「少し許の軍卒では、不可易く征つべからず。」◆同欽明2年（541）（卓淳・南加羅・喙己吞は既に新羅に併合されていたため）**百済聖明王（523～554）に任那復興を要請するも実行されず**。

⑭ 562年に、新羅により任那滅亡。以後復活しない

本来は532年の記事か？

◆『書紀』欽明23年（562）春正月に、新羅、任那の官家を打ち滅しつ。



4世紀後半から6世紀初頭まで半島に侵攻、百済に駐留し高句麗・新羅と戦っていたのは九州の勢力だった。